

書評

Van Cleve, James: *Problems from Kant* (Oxford University Press, 1999, xii+340p.)

赤嶺 宏介

本書は、合衆国のブラウン大学の教授である著者が、つねに現代の英米哲学を考慮に入れつつ、カントの理論哲学の諸問題を全般的に論じたものである。おおむね『純粹理性批判』の構成の順序にしたがって配列された十三の章と付録とは、それぞれ、ほとんど独立した問題を扱っているが、それにもかかわらず、この書の主な関心は、实在論と観念論とに対するカントの超越論的観念論にあるとすることができる。このことは、「おおむねカント自身と同じ順序で」諸問題を論ずるはずの書物の本編が、「超越論的観念論：概観」と題された章に始まり、「カントと現代の非实在論」と題された章に終るという事実からも察せられよう。

超越論的観念論の背景には、観念論と实在論との長きに亙る争いがある。物を、認識主観に依存する物であるところの「現象」と、認識主観に関係なくそれ自体において存在する物であるところの「物自体」とに区別するカントの用語法に従えば、この争いは、「世界は現象であるのか、それとも物自体であるのか」という問いに置き換えることができる。これに対して、カントの超

越論的観念論とは、「空間あるいは時間において直観されるもの、したがって我々にとって可能な経験の対象はすべて単なる現象であり、物自体ではない。したがって現象は、それ自体においては、实在性を有しない。しかし、経験においては、その实在性は否定されるべくも懷疑されるべくもない」という説である。そのうえで、超越論的観念論における現象と物自体との関係についていくらかの考察がおこなわれもするが、しかし、特筆すべき本書の特徴は、カントにおける現象概念の解釈の方にある。そもそも、上の説明からあきらかであるが、超越論的観念論においては、現象が重要な位置を占めている。

それでは、カント的現象とは如何なるものであるか。著者はいわゆるカントのコペルニクス的転回に言及する。それは、「客観が我々の認識に従うのであって、その逆ではない」という命題によって要約されうる。認識に従う「客観」とは、勿論、現象の謂であるが、ここで著者は、現象と認識とを切り離して考えることを拒否する。さもなければ、認識と区別された現象がそれでも認識に従うのは何故であるのかという難問がたちまち生ずるだろう。そこで著者は、現象を「仮の客観」(virtual object) として見る。我々が認識の客観として語るものは、実のところ、認識の仕方や種類から仮構されたものである。この事情は、芝生に落ちかかる木陰は、太陽や木や芝生によってあるので、それ自体厳密には存在物ではないにも

かわらず、それでも我々が「そこに木陰がある」ということに似ている。このように考えると、現象と認識との関係について生ずる先の問題を回避することができるのは確かである。

この解釈によると、例えば、赤い現象を認識することは、赤く認識することにほかならない。しかしこれは注意を要する表現である。第一に、ここには、一見して、しかじかの物を認識するという対象性が希薄であるために、認識の客観性が見失われるかもしれない。「赤く認識する」ことが、想像や妄想をも含みうるものと見做されるかもしれない。しかし、そもそもカントにおいて認識は客観性を有するのであるから、「赤く認識する」といったところで、それが単に主観的であるにすぎぬ想像や妄想として解される余地はない。とはいえ、第二に、感性的直観としての現象の受容性の側面が希薄であるために、この解釈は、客観が主観によって自発的に産出されうることを認めるものであるかのように思われるかもしれない。しかし、かかることは少なくとも人間には不可能であるというカントの注意を記憶に留めておかねばならない。ただし、この注意は論証されるべき事柄ではなく、むしろ、カントの認識論の前提に属する事柄である。

これらの点を踏まえたうえで言うならば、著者の解釈は明快であり、また、客観と認識作用とを区別しない点で、カントの認識論の解釈として妥当であって、優れたもの

である。カントは、主観と客観とを認識に先立って区別することを拒否するからである。カントの認識論とは、あらかじめ規定された実体的な主観および客観のあいだにありうべき認識作用についての探究ではない。カントにおいては、逆に、認識の可能性、さらに言えば、数学や物理学におけるア・プリオリな総合的認識の可能性から出発して、そうした認識の可能性の条件が探究される過程において、はじめて認識の主観と客観とが規定されるのである。『純粹理性批判』の演繹論における超越論的主観と超越論的客観を想起されたい。客観を認識の仕方と見做す著者の解釈はこの点をうまく捉えている。かくしてカントの超越論的観念論は、著者なりの一貫した仕方によって解釈されているのである。

書評

Christia Mercer,
*Leibniz's Metaphysics :its origins
and development* (Cambridge
University Press, 2001, 13+528p.)

枝村 祥平

本書は、マーセルが1989年にプリンストン大学で提出した博士論文をその後の研究によって充実・発展させたものである。マーセルは現在コロンビア大学哲学科助教授を務めている。ライプニッツ(1646-1716)の形而上学が初期から中期をへて後期へと発展していったという従来の説に対抗し、1670年代までに実体概念や神を介した予定調和など彼の形而上学の核が出来あがっていたとの主張がなされており、巻末のD. ガーバーの評が示すとおり極めて「野心的な(bold)」著作となっている。また、アリストテレス流の実体概念や近代の機械論だけでなく、プラトニズムがライプニッツの形而上学形成に果たした役割を強調しており、その点でも独自性がある。さらに、解釈を裏付ける膨大な文献考証がなされている。

本書は序論に続き、本論4部および結論により構成される。大まかに流れを示すと、第一部でライプニッツが形而上学形成にあたって取った折衷の方法が説明され、第二部・第三部では、アリストテレスとプラトンをいかに受容したかが述べられ、第四部では両説の総合がどのようになされたかが

述べられる。以下に詳細を示す。

「第一部 方法の形而上学」では、ライプニッツの形而上学形成の方法が語られる。それは、師ヤコブ・トマジウスを初めとする当時のドイツの学者からの影響の下にある、折衷・総合の方法であった。そして、ライプニッツの形而上学は、プラトン主義、アリストテレス主義、及び機械論哲学の総合の産物であったとされるのである。機械論哲学とは、勿論、ホップズ・デカルト・ガッサンディなど同時代人の自然哲学を指している。機械論哲学はしかし、専らアリストテレス哲学を補完する機能を持ち、より端的にはアリストテレス主義とプラトン主義の総合こそがライプニッツの形而上学であったとされる。

「第二部 実体の形而上学」では、アリストテレス主義をライプニッツがどのように受容したかが述べられる。十代~二十代のライプニッツは、アリストテレス主義に批判的であり、機械論的自然学に惹かれていたとしばしば言われてきた。しかしマーセルは、確かにライプニッツは凡庸なスコラ学者によって主張されたアリストテレス主義の見解には批判的であったが、アリストテレス自身の見解は実は機械論的自然学と両立可能であると考えていたのであり、アリストテレスの見解を一貫して重視してきたという立場を取る。そして、次のようなテーゼをライプニッツはアリストテレスから学んだとされる。つまり、実体的形相と受動的原理により実体の本性が構成され

ていること、精神のみならず物的実体も存在すること、の二つである。

「第三部 神性の形而上学」では、プラトン主義のライブニッツによる受容が説明される。これは後の予定調和説の形成に決定的な役割を果たしているとされる。ライブニッツがプラトニズムから学んだ事柄は、主として次の二つである。即ち、被造物が一者即ち神から流出したものであること、及び一者を原因とする個体は、お互いを表現しあうような調和の関係にあること、である。

「第四部 形而上学」では、以上を踏まえた上で1670年代におけるライブニッツ形而上学の形成が説明される。最初の章では、1670-71年のテキストにおける、アリストテレス主義に由来する、「質料、受動性、そして汎有機的生命論」が整理される。続く二つの章では、1671-72年のテキストにおける、プラトン主義に由来する「予定調和」が論じられる。最後の章は、1672-79年において、成熟期の哲学がかなりの程度示されていることを論じている。つまり、アリストテレス主義に従い、個体が実体として独立自存するとされ、加えて個体は神を共通の原因とするがゆえに互いに対応し表現しあう関係にあるとされるのである。

この時期の議論として注目すべきものに、1676年のテキストにおける物的実体(corporeal substance)についての議論がある。抽象的一般的に規定されていた実体概念が、物体をも含むものとして改めて具体化され

るのである。

マーセルの解釈はライブニッツ形而上学全体を独自の視点から発展的に説明しようとする壮大なものであり、それだけに多くの論点が検討すべきものとして残されている。例えば、マーセルが第二部で、ライブニッツは一貫してアリストテレスのテーゼを捨てようとしなかったが、一方でライブニッツがアリストテレスを自己流に解釈していると述べている点である。なぜなら、ライブニッツが意識的にアリストテレスから距離を取ったと考える解釈がむしろ自然に思われるからである。

また一般に、中期から後期へかけて、ライブニッツは物理学での活力(vis viva)についての考察をさらに発展させることで形而上学的な力の概念を成熟させたとされるが、1670年代までにライブニッツの形而上学が実質的に完成されていたと主張するにはこの時期の発展が些細なものに過ぎないことを立証しなければならないだろう。今後のマーセルの研究に期待したいところである。

書評

Rob Clifton,
Quantum Entanglements (Oxford
University Press, 2004, 504 p.)

北島 雄一郎

科学哲学は、現在大きく分けて二つの流れがある。一つの流れは、物理学や生物学など様々な科学理論が共通に抱える哲学的問題を考える分野であり、科学哲学の一般論とよばれる。科学理論は我々の認識とは独立で我々が観測できないような対象を記述していると考えた立場は科学的实在論とよばれるが、このような立場が妥当であるかどうかという問題は、科学哲学の一般論に含まれる。もう一つの流れは、物理学や生物学などの個々の科学理論が抱える固有の哲学的問題を扱う分野で、対象にする分野に応じて、量子力学の哲学、時空の哲学、生物学の哲学などとよばれる。

本書は、量子力学の哲学において優れた業績を残した Rob Clifton の論文集である。彼の業績は、量子力学の哲学に関する研究に大きな影響力を及ぼしているが、それにとどまらず科学哲学の一般論を研究する上でも考慮に入れるべき結果を含んでいるように思われる。しかし、本書ではそのようなことを明示的に述べている部分はほとんどない。そこでここでは、本書の 5 章(No place for particles in relativistic quantum theories?)と 8 章(The modal interpretation of

algebraic quantum field theory)に注目し、この章に含まれる結果は科学的实在論の立場に対して重要な問題提起をしているということ述べたい。

科学的实在論の立場に立つならば、科学的实在論が妥当であるということを論証すると同時に、科学理論がどのような实在像を与えているのかを述べる必要があるだろう。ここでは、特殊相対論と量子力学を数学的に厳密に統合しようとする試みの一つである代数的場の量子論(例えば、[1]を参照)が描く实在像を検討する。そして、本書で述べられている結果に基づくと、现阶段ではこの理論は適切な实在像を与えているとはみなせないということを見る。

代数的場の量子論は、状態と「物理量 A を観測したら、物理量 A の値は E という範囲の中である」という形の観測命題から構成され、観測命題は有界な時空領域に対応させられる。そして、ある状態のもとで、ある有界な時空領域において物理量 A を観測したとき、物理量 A の値が E という範囲の中にある確率が計算できる。

代数的場の量子論が記述している対象として考えられるのは、場か粒子であろう。そこで、代数的場の量子論が、場を記述していると考えられるのか、粒子を記述していると考えられるのかを検討する。

まず、代数的場の量子論は場を記述しているかどうかを考えよう。場とは、時空に物理量が対応させられているものと考えられる。代数的場の量子論の場合は、時空領

域に観測命題が対応させられている。観測者の存在が前提とされている命題を対応させている時空は、我々の認識と独立に実在している場とみなすことはできないだろう。そこで、観測命題を「物理量 A の値は、観測とは独立に E という範囲の中にある」という命題に解釈できるかどうか考える必要がある。そのためには、観測とは独立に、観測命題の真偽が定まっているとみなすことができることが必要であろう。「物理量 A を観測したら、物理量 A の値は E という範囲の中である」という観測命題が真であれば、この命題は「物理量 A は観測とは独立にある値をもっていて、その値は E という範囲の中にある」と解釈できる。しかし、一般には、[2] Theorem 7.3.1 のような定理に基づいて、有界な時空領域に対応させられた観測命題すべての真偽が確定しているとみなすことはできないと考えられている。そこで、どの観測命題の真偽が確定しているとみなすことができるのかを調べる必要がある。Clifton は真偽が確定した観測命題は状態のみから決まると考えて、それがどのような命題であるかを明らかにした（本書の 5 章の Proposition 1。より一般的には [3] Theorem 11）。Clifton の解釈に従えば、状態のみから決まる真偽の確定した命題が時空に割り当てられた場が存在することになる。しかし、Clifton 自身によって、ある状態のもとでは物理的に意味のある真偽の確定した命題を時空領域に対応させることができないということが指摘されている

（本書の 5 章の Proposition 3）。この問題点を回避するアイデアを提出するか、Clifton とは別の解釈を提示しない限り、代数的場の量子論が場を記述していると考えるのは難しいように思われる。

次に、代数的場の量子論が粒子を記述しているかどうかを考えよう。粒子なのだから、有界な時空領域で個数を数えられると考えていだろう。しかし、本書の 8 章の Theorem 3 によれば、代数的場の量子論において有界な時空領域で粒子の個数を数えることはできない。つまり、粒子は有界な時空領域において個数を数えられるとすると、代数的場の量子論のもとで粒子を考えことはできない。

まとめると、代数的場の量子論が記述する対象を場であると考えても粒子であると考えても、現段階では適切な実在像を与えているとはいえない。もし科学的実在論を支持するならば、Clifton の定理の中のどの前提が妥当でないかを明らかにし、代数的場の量子論のもとで適切な実在像を示すことが必要であろう。

参考文献

- [1] Haag, R. (1992), *Local Quantum Physics*, 2nd ed., Springer, New York.
- [2] Hamhalter, J. (2003), *Quantum Measure Theory*, Kluwer, Dordrecht.
- [3] Kitajima, Y. (2004), 'A remark on the modal interpretation of algebraic quantum field theory', *Physics Letters A*, 331, 181-186.

書評

Louis E. Loeb, *Stability and Justification in Hume's Treatise* (Oxford University Press, 2002, +280p.)

佐藤 旭

本書は、ヒューム『人間本性論』における、信念とその規範の問題を扱うものである。タイトルから予想されるように、ロエブの主張は一貫して、「心理的な安定(stability)」が信念の正当化の基準となる、というものである。

ヒュームの認識論において主要なテーマのひとつとなっているのは、「信念」に関する議論である。因果推論や外界存在など、現前する印象を越えるものに対する「信念」は、人間の認識活動において重要な役割を果たしている。『人間本性論』第一巻「知性論」の大半を占めるのは、こうした信念の本性とその形成過程についての論述である。

しかし、因果推論や外界存在の信念だけでなく、宗教や迷信など多くのことを人は信じてしまう。確かに、ヒュームはこれらの信念が形成される心理的メカニズムを記述してはいる。では、心理学的問題だけでなく、認識論的問題 すなわち正当な信念とそうでないものの区別に対して、ヒュームはどのように答えているのだろうか。ロエブは、ヒュームの議論から規範としての「心理的安定性」を抽出し、それをベース

に知性論の再構成を試みている。

こうした目論見のもとに、ロエブはまず、『人間本性論』を「建設的な部分」と「破壊的な部分」に分ける。前者は、因果推論など信念の発生過程が論じられる部分であり、後者は、ヒュームの懐疑的側面が現われる部分である。

まずロエブのいう、「建設的な部分」から見ていこう。

ヒュームの因果論は哲学史上でもよく知られており、<対象間に必然的結合はなく、恒常的接続の経験から生じる心の習慣によって因果推論はなされる>というものである。そして習慣に基づいた因果推論は確実に正しい信念とみなされる。なぜヒュームは因果推論を正しいものと考えたのか。ロエブによれば、ヒュームの含意するところは「ある信念が正しいのは、心理的な安定を与えるようなメカニズムによって、その信念が形成されるときである」という規範である。ヒュームが明言する、観念の生氣(vivacity)によっては正当な信念と狂気を区別することはできない。むしろ信念とは心の傾向性(disposition)であり、それが正当かどうかは、思考や意志、行為に対する影響力の「安定性」によるのである。

信念を形成するメカニズムのひとつは「習慣」である。習慣とは反復によって信念を固定する(infix)ことであり、これが信念の安定性を生みだす、とロエブは解釈する。そしてこのよい例が、経験の反復から生じる因果推論なのである。さらにヒュームが、

正しくない信念に対して「変動する (fluctuating)」や「移ろいやすい (momentary)」という性質を見てとっているということも、ロエブの主張を支持している。こうした「安定性」という考えのもとに、ヒュームの「建設的」な議論がなされているのである。

ロエブは、この解釈をさらに「破壊的な部分」においても展開する。『人間本性論』第一巻最終章にみられる懐疑論は、皮肉にも、我々が真理を追究することによって生じるものである。「理性に対する懐疑論」に関しては、絶対確実なるものを求めて自らの認識能力に対して反省を加えること自体が、信念を不安定にする (destabilize)。また外界存在に関しては、日常的な外界の信念が反省されて、哲学体系における主観的観念論と外界の実在論というさらなる対立原理を生じさせる。この対立によって信念の「安定性」は揺き乱され、それゆえ正当な信念は得られない。

以上の議論は、逆説的な帰結を導く。反省しない人 (unreflective person) にとって信念は安定しており、正しいとされる。他方で、反省する人 (reflective person) にとって信念は不安定であり、それゆえ不当なものとされる。ロエブによれば、こうした逆説的な事態によってヒュームが主張したかったことは、知的作用に認識論的な優位を与えるのは偏見である、ということだ。

では無反省な全くの独断的信念は正当化されるのか。しかし習慣や経験から乖離した独断的信念が安定することはほとんど

ない、とロエブはいう。というのも、他者との意見の相違や経験の影響によって対立する事例が現われ、独断的信念は不安定なものとなるからである。

以上のように、ロエブは「安定性」という原理のもとに一貫したパースペクティブを示す。しかしロエブの議論には不十分さが残る。彼はヒュームの議論を「建設」と「破壊」とに二分した。しかしヒュームは「破壊」のあと、さらに懐疑から回復する。本書ではこの点について、わずかに言及するだけである。ロエブによれば、反省的な人も信念が不安定ではないくつろいだ状態 (relax) にいられるが、その状態は新たな反省・破壊の種を含んだものである。つまり、ヒュームの懐疑からの回復は一時的なものであり、常に新たな反省へと開かれている、と考えるのである。しかし、これをヒュームの見解とするのには疑問が残る。というのも、ヒュームが最終的に意図していたのは、自然な傾向性と知的反省を対立関係におくことではなく、両者を協働させることであるからだ。そこにおいて反省は心を不安定にするどころか「節度ある意見 (moderate sentiments)」を生み出すのである。従って、<心理的な安定が信念の規範となる>というロエブの主張は維持されるものの、<反省は心を不安定にし、それゆえ信念が不当なものとなる>という図式は、大きな修正を要求されるであろう。安定した傾向性に基づく知的反省という点をロエブは考慮しなくてはならない。

書評

Keith Ansell Pearson, *Philosophy and The Adventure of The Virtual*, —Bergson and the time of life—, (Routledge, New York, 2002, +246p.)

三宅 岳史

本書はドゥルーズ『ベルクソンの哲学』(Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, Paris, 119p.)の成果をふまえた解説書であり、本書の題名が示すように「潜在(the virtual)」という概念の解明が目指されている。

論旨の展開は、概ね丁寧で平易であり(一部例外も存在する)この点は英米系のベルクソン研究書にしばしば見られる長所として挙げることができるだろう。

本書はベルクソンの哲学をテキストの年代順に追っていくのではなく、潜在という概念を様々な視点から分析し、それらを各章で扱っている。

なかでも、最も核となっていると思われるのは、本書の第四章で、バディウによるドゥルーズ批判を吟味する際に、筆者が明らかにする潜在の性質である。バディウは、潜在＝一者である永遠とみなし、ドゥルーズ哲学は潜在のプラトニズムであると批判する。筆者によれば、バディウの誤謬は、潜在が顕在化する運動をプロチノス的な流出と捉えることである。それにより、両者の間に階層ヒエラルキーができ、顕在の運動が潜在の

不動に従属させられ、超越性が導入されるからである。潜在は流出ではなく、顕在に内在しつつも自己差異化として捉えねばならず、空間・幾何学的な顕在という様相と時間・生成的な潜在という様相は区別されるべきだが、両者は不可分であり、そこに階層を導入してはならないのである。

この潜在の自己差異化の運動は、生物の進化と記憶という相から、それぞれ本書の第五章と第七章で扱われている。第五章ではこの自己差異化が、『創造的進化』の機械論と目的論の批判の核になることが示され、ベルクソンとカントの目的論に対する思考が比較されている。

第七章では、『物質と記憶』の第二、三章が扱われ、純粹記憶＝潜在が主題となる。この章はドゥルーズ『ベルクソンの哲学』第三章と関係が深い。純粹記憶は存在するのを決してやめず、この即自的存在は純粹記憶の潜在の大きな特徴である。ただし、筆者によると、これは先に見た潜在の自己差異化の一つの側面でしかない。この自己差異化は潜在と顕在という二つの異なる方向に引き裂かれ、ここで(潜在＝記憶＝)過去と(顕在＝物質＝)現在が同時に共存するという奇妙なベルクソンのテーゼが生じることになる。この潜在と顕在の二重化の運動を可視化するのが『シネマ2』で述べられるクリスタル＝イメージである。

本書の他の章は、自己差異化という潜在の核となる性質から出てくるような他の性質を論じているように思われる。第一章は

潜在と顕在を時空論あるいは連続性の観点から扱っており、これはドゥルーズ『ベルクソンの哲学』第二章のテーマに相当する。筆者はベルクソンの連続性に関する思考がリーマン幾何学を背景にしていたというドゥルーズの指摘を吟味し、次にラッセルを引き合いに出して、ベルクソンの連続性と数学の連続性との違いを論じる。また、この多数性とカントの時間論が比較され、ハイデガーのカント論なども援用されている。

第二章は、『持続と同時性』における時間の単一性という潜在のもう一つの側面に光が当てられる。(ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』第四章に相当)ここでは、Milič Čapek, *Bergson and Modern Physics*, D.Reidel Publishing Company, 1971 の成果がうまくまとめられている。またアインシュタインの時間観に対しては異議を唱え、時間や生成が単なる主観や幻ではないとするポパーの思考がベルクソンの思考と比較されている。

第三章は、ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』第五章に対応しており、ベルクソン哲学の可能と潜在との違いが説明される。可能は、潜在 = 生成を空間的な図式に還元する思考であるというベルクソンの説を示した後で、筆者は、論理空間を使うデネットの進化の説明もこの可能という思考の一例であると批判する。これが正鵠を射ているかは評者には判断できないが、現代の進化論の一つにこの批判が通用するかを吟味することは興味深い問題だと思われる。

また第六章では、『物質と記憶』第一章

と第四章が扱われ、それぞれ知覚と物質における潜在の関わりが示されている。

このように、ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』を読んだがまだよく分からないという人にとっては、本書をベルクソン哲学の入門書として役立つことは可能である。また日本にもすでに、ドゥルーズのベルクソン論の紹介としては、檜垣立哉『ベルクソンの哲学』(勁草書房、2000年、東京、x+281頁)が出版されている。その意味では、両者の果たす役割や目的、そして特徴なども共通する点が存在すると言えるだろう。

ただし、この種の本に共通の危険性として、ベルクソンのドゥルーズ化、あるいはその反対に、ドゥルーズのベルクソン化が生じやすいということには、読者は十分に注意すべきである。筆者は、その点に関して「序」で自戒しているのだが、その自戒も十分ではない。一例を挙げると、本書のキーワードである「潜在」に関しては、ベルクソンとドゥルーズの差異がほとんどなし崩しにされており、少なくとも両者の相異を最後にまとめるくらいの配慮は欲しいと感じた。ドゥルーズとベルクソンの差異を踏まえつつ批判的に論じる視点としては、中敬夫『自然の現象学』(世界思想社、2004年、京都、+241頁)の第三章第四節を挙げておきたい。本書はこのような視点と照らし合わせて読まれる必要があるだろう。(もちろんどちらかが一方的に正しいというわけではない。)